

## 4. 南山城村田山宮本座所蔵文書について

田中淳一郎（技師）

### 1. 田山村と宮本座

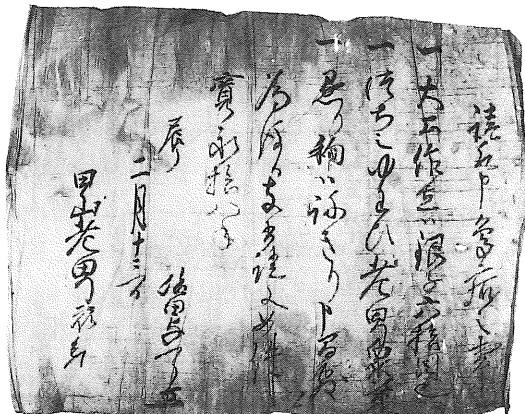
相楽郡南山城村大字田山は、京都府の最東南端に位置する村で、三重県鳥ヶ原村および奈良県月ヶ瀬村と境を接している。村内を名張街道が貫通することからも、京都よりも伊賀・大和との関係が深かったことがうかがえる。

田山の氏神は諏訪神社で、雨乞いの願済しの奉納芸能として行なわれる花踊りで知られている。田山には、宮本座と仲間座の2つの宮座があり、旧来の村民ほとんど全戸がいずれかの座に属しており、イトウ（一統）と呼ばれる血縁結合が座の家筋を決定している<sup>(注1)</sup>。座の行事は、仲間座が諏訪神社で、宮本座が神社近くの観音寺で行なうというが、宮座の起源などはよくわかっていない。

ところで、宮本座には、中世からの古文書が伝わっていて、在地に残る中世文書として貴重なものである。この文書を紹介することにより、中世末期の田山の様相を探ってみたい。

### 2. 宮本座所蔵文書の概要

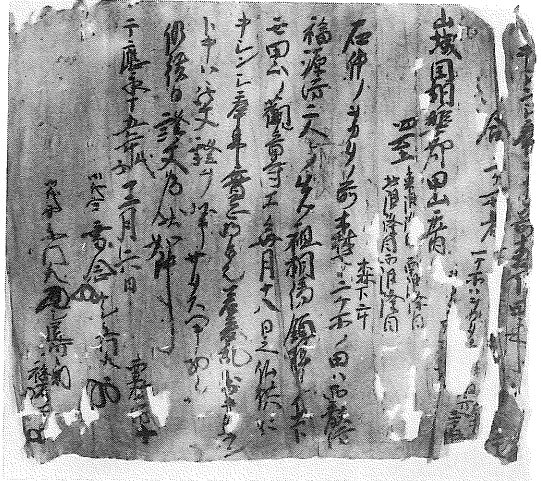
宮本座所蔵文書は、総点数500点ほどで多くは明治以降のものである。中世文書は、断簡も含め約20点、近世文書が約100点含まれているのが注目される。近世文書は、宮座と諏訪神社・観音寺



写-1 鳥居請取状

に関するものがほとんどであるが、寛永18（1641）年の「鳥居請取状」（写-1）をはじめ、近世初期の史料が多いことが特徴的である。

近世文書の紹介は別の機会に譲り、今回は中世文書を見ていく。ただ、いずれも破損がひどく、不明箇所も多いことが惜しまれる<sup>(注2)</sup>。中世から近世初期の文書目録を別表に掲げておく。



写-2 西教坊・福源坊田地寄進状

宮本座所蔵文書のなかで最も古いものは、応永15（1408）年12月6日付の「西教坊・福源坊田地寄進状」である（写-2）。

キシンスン奉ヲカタ前森下田事

合二ヶ所者 一ヶ所 森下□□  
一ヶ所 ハヲカタ□□

山城国相楽郡田山庄内

東限際目 南限際目  
西至 北限際目 西限際目

右件ノヲカタノ前森下二ヶ所ノ田ハ西教坊  
福源坊二人ノ先祖相伝領□□とイエト  
モ田山ノ観音寺エ毎月十八日之仏供仁  
キシンスン奉事実正明白也、若違乱出キタラン  
トキハ此文證ヲ以テサタスヘキ物也、  
仍後日証文為状如件

千応永十五年<sup>庚子</sup>十二月六日 西教坊（略押）

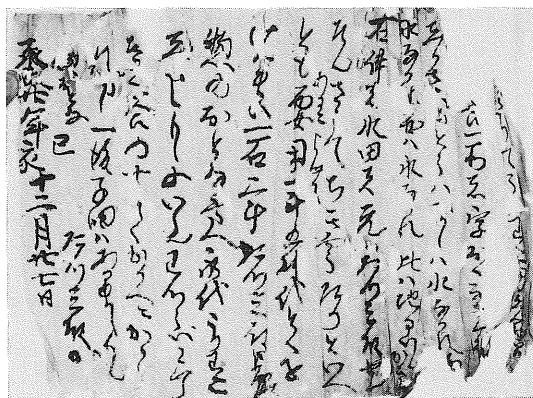
御代官乗念（花押） ケシ□門房（花押）

御代官□門房（花押）ケシ道阿ミ（花押）  
福源坊（略押）

西教坊・福源坊の両名が、先祖相伝してきた田地を観音寺へ仏供料田として寄進した文書である。両名とともに署名連判しているそれぞれ2名ずつの御代官とケシ（＝下司）は、田山庄の庄園領主から任命されている庄官であり、在地の人物であったと思われる。庄園内の土地の移動には庄官の連判が必要であったようで、応永30（1423）年の「左□□田地売券」にも庄官「道仙」の署名花押がある。これら代官や下司の成長した姿が、いわゆる「山城国一揆」に結合する国人たちである。著名な狛氏も狛野庄の下司であった。彼らは、庄園の庄官であることを楨杆にして、勢力を伸張させていったのである。「山城国一揆」が庄園代官となることを望んだことも、在地支配の観点から見落せない。「山城国一揆」に、はたして田山の在地土豪も参加したのか明らかではないが、南山城では揆を一にして、庄園制のなかから新しい動きが芽生えていたのである。

### 3. 田山「惣」の成立

元龜2（1571）年の年紀を持つ文書断簡には、宛所として「田山・高尾両老男衆中」が記されている。高尾は、田山とは名張川をはさんだ対岸にある村である。ここにみえる「老男」（おとな）とは、惣村の「おとな」のことと思われる。おそらく天文20（1551）年のものと推測される「たつ三郎田地売券」は、「たつ三郎」が田地を「惣の



写-3 たつ三郎田地売券

おとな方」へ売り渡している点で注目される史料である（写-3）。

□□かきりてうりわた申候しんけ覚  
合一所者字おゝなかくほ  
しゝさいめとうハ、ひかしハ水ななかれ南ハ  
水ななかれ西ハ水ななかれ北ハ地るいヲかきる  
右件者水田者元ハたつ三郎セン  
そんさうてちきやうたりといへ  
とも要用あるニよツて一斗五升代とくを  
けんまい一石二斗たつ三郎より  
惣のおとな方へ永代うりわた  
し申候、もし子いらんわつらい候ハゝ  
きた谷の□□□てかゝヘニかゝら  
れ申一後子細ハあるましく候  
惣おとな たつ三郎（筆軸印）  
□文廿年<sup>己亥</sup>十二月廿七日

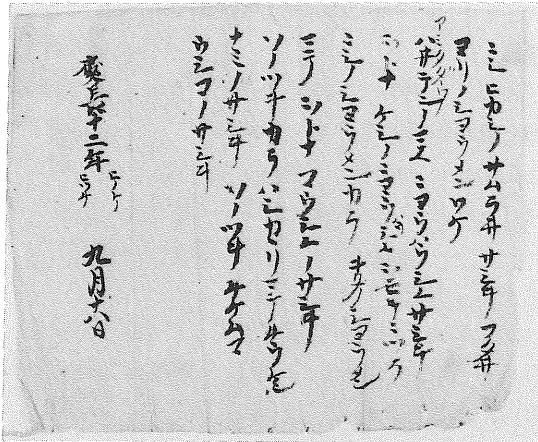
全文たどたどしいかな書きで、年号も推測したものであるが、16世紀前半には田山惣が機能していることを示している。

惣とは、年寄や「おとな」と呼ばれる人々を中心に運営される自治性の高い、中世後期に畿内・近江に多く見られる村落形態である。田山や高尾に惣が形成されるのは、庄園領主や武家の直接支配がおよびにくかったためである。<sup>(注4)</sup>

田山惣には、「老男」「長男」と書かれている「おとな」衆と、「たつ三郎」などのそれ以外の村民との少なくとも二階層があった。「おとな」衆の性格はわからないが、前に述べた代官や下司の系譜を引くものもいたであろう。「おとな」衆は、土地集積を行ない、とくに惣の共同用益の場所である山や林を支配し、惣内部では権力者であった。近世の史料であるが、寛永9（1632）年の「マコセハシ山請状」は、マコセが山の畠を利用するかわりに毎年米8升を「ヲトナ衆」へ納めることを請合った文書であるが、惣の「おとな」が山を支配していることをしめしている。

このように、中世後期にあらわれた在地の動向は、田山や高尾にも惣を産み出していった。惣内部では、惣運営の中心である「おとな」衆と一般の村民との階層が生じていた。

#### 4. 惣と宮座



写-4 棧敷差配状

宮本座所蔵文書のなかに、かたかなで書かれた慶長12（1607）年9月18日付の「棧敷差配状」がある（写-4）。同時期のものと思われる「田山御宮ノウツシノ日記」断簡が残っていて、遷宮のときに猿楽が催されたことが知られるが、おそらく、このような観能のときの棧敷の配置を決定した文書であろう。

ニシヒカシノサムラキサシキフタキ  
ヨリノショウメンワケ  
アマタダウ  
ハキテンノマエ、ニョウハウシンサシキ  
ヲトナケシノニョウハウシンヲモテニツク  
ニシノショウメンカラキタノショウメン  
マテヲトナコウシンノサシキ、  
ソノツキカラハシカヽリマテチウケン  
ナミノサシキ、ソノツキチケムコ  
ウシコノサシキ

ヒノトノ  
慶長十二年ヒツチ 九月十八日

これではなんのこともわからないので、漢字まじり文に書き改めておく。

西・東の侍棧敷、舞台よりの正面分け、阿弥陀堂拝殿の前、女房新棧敷、おとな・下司の女房、新表に続く西の正面から北の正面迄、おとな後進の棧敷、その次から橋掛り迄、仲間並の棧敷、その次地下、聳、氏子の棧敷、と仮に読んでみた。ここには、侍、おとな、仲間、

地下、聳、氏子の階層が記されている。侍についてはよくわからない。「田山侍衆」という語が、諏訪神社宮司西城武夫氏所蔵の「柳生宗矩下知状」のなかに見えるので、中世においては武士的性格が強かったものの兵農分離の過程で土着した者たちを指すのかもしれない。仲間は、おとなと地下と中間の層で、地下は、「たつ三郎」や「マコ七」たちである。聳は、他家や他村から聳入りし婚家を継いだ者で、氏子は、庶子や子供たちのことであろうか。

このように、猿楽を観る棧敷の場所に惣内部の階層差が現われるのである。綴喜郡井手町多賀に鎮座する高神社に所蔵される古文書によって、神社造替の際の奉納散楽見物の棧敷についても、同様の事例が確認できたが、氏神社における祭礼の場が村落内部の階層序列を再確認する場ともなっていたことに注意しておきたい。

こうして、中世から近世へ、惣から近世村落へと移行するなかで、たとえば氏神の前に結集するときに、それぞれの階層ごとに集まる形式ができる。同じ階層はますます結び付きを強める。それは、ひいては宮座結合という、本質的には非常に閉鎖的な社会組織を作り出す<sup>(注7)</sup>。田山の現在の宮座の名称や伝承から推すと、宮座の原形がかたちづくられたのは、慶長前後の近世初頭であったと考えても良いであろう。しかし、現在のところ文書史料に宮座が初めてみえるのは、貞享元（1684）年の「宮本座衆」宛の文書である<sup>(注8)</sup>。今後の発見に期待したい。

最初に挙げた「鳥居請取状」（写-1）は、氏神の鳥居を神官と思われる嶋田与一郎が田山老男衆から請け取った証文である。寛永18（1641）年の鳥居造立の「勸進帳」が残り、老男（おとな）衆が取り仕切ったことが知られる。宮座としては出てこないのである。近世にはいっても、惣以来の「おとな」衆の勢力が強固であったのだろう。また、「勸進帳」では「中間衆」23人が別にまとめて記載されていて、のちの仲間座につながると思われる結び付きができていたことが確認される。ところで、田山では現在宮座の年長者を長老（オ

トナ)と呼んでいる。これは、宮座の本来の構成員が惣の「おとな」であったことを反映しているのではないだろうか。氏神祭礼等の史料には、後のちまで、「田山長男」の語が見出せるので、<sup>(注9)</sup>「おとな」を構成員とする宮座があって、その座が氏神諸事を行っていたと思われる。その後次第に宮座が開放されるにしたがい、宮座を代表する長老に「おとな」の名が受け継がれたのであろう。

## 5. 伊賀惣国と田山惣

論が近世に進んだが、中世にもどして、田山惣の形成を隣国伊賀との関わりで見たい。

応仁・文明の乱に続く両畠山の合戦で南山城が戦場になったとき、伊賀国人は、御厨子(水主)<sup>(注10)</sup>や外野(富野)に在陣している。「山城国一揆」成立とともに帰国したのだろうが、田山は往還にあたっただろう。また、田山惣を確認した天文20(1551)年に近い天文10年11月、伊賀衆は笠置城を攻撃するも敗走している。以後伊賀国人は結束を強め、天文年間に有名な惣国一揆を形成する。<sup>(注12)</sup>伊賀国人の通過、惣国一揆形成という動向を、おそらく境を接する田山の村民は敏感に感じとっていたことだろう。他国人による蹂躪に対して結成された「山城国一揆」もあった。戦国の動乱のなかで、自分たちの村を自分たちの手で守るために、惣という結合を築き、「おとな」を指導者に立て、中世から近世の激動を生きてきたのである。

伊賀の動きのなかで、田山に惣が形成されたのではないかと考えられることを指摘し、この点は今後検討することを約し、結びにかえたい。

(注1) 京都府教育委員会『高山ダム水没地区調査報告書』(1966)

(注2) 昭和59年に、関係者の尽力によって中世文書については補修が施された。

(注3) 「狛野庄加地子方納帳」(国立公文書館内閣文庫所蔵文書)

柳千鶴「室町幕府崩壊過程における山城国一揆」(日本史研究会史料研究部会編『中世の権力と民衆』所収 1970)

(注4) 佐々木銀彌『日本の歴史13 室町幕府』(1975)

(注5) 『高山ダム水没地区調査報告書』所収写真

(注6) 田中「高神社文書と多賀郷」(『山城郷土資料館報』第2号 1984)

(注7) 三浦圭一「惣村の起源とその役割」(『史林』50-2・3 1967)

小山靖憲「中世賤民論」(『講座日本歴史4 中世2』所収 1985)

(注8) 「相済申判状之事」(宮本座所蔵文書のうち)。この文書は、東城氏、西城氏等侍衆が村内の争論を裁許している点、興味深いものがある。

(注9) 「宮移祝料請取覚」(明和9(1772)年、宮本座所蔵文書のうち)

(注10) 『大乘院寺社雜事記』文明17年10月14日条

(注11) 『多聞院日記』天文10年11月26日・28日条

(注12) 「伊賀惣国一揆掟書」(『中世政治社会思想 上』所収 1972)

石田善人「甲賀郡中惣と伊賀惣国一揆」(勝俣鎮夫編『中部大名の研究』所収 1983)

### 宮本座所蔵文書目録(中世～近世初頭分)

応永15・12・6	西教坊・福源坊田地寄進状	1通
応永30・10・27	左□□田地売券	1通
天文8・3・20	六大郎田地売券	1通
天文12・10・16	高尾・田山の入目日記	1冊
(天文)20・12・27	タツ三郎田地売券	1通
天文22～文禄3	タラニカウノ日記	1冊
永禄元～5	納日記	1冊
元亀2・3・23	(断簡)	
慶長10・12・8	御さうく入目日記	1冊
慶長12・9・18	棧敷差配状	1通
慶長16・正・吉	大明神公事米請状	1通
寛永9・12・18	マコセハシ山請状	1通
寛永18・2・13	鳥居請取状	1通
寛永18・2・27	鳥居勧進帳	1冊
寛永18・12・吉	田山村鳥居入用状	1通
正保4・11・29	田山・石打山論済状	1通
正保5・5・吉	毎年サナボリノ帳	1冊
中世末～近世初	田山御宮遷日記	8点

他は貞享・元禄以降の文書である。